

と言うと、

「何かが後ろから押さえて、放さないのだ」

と言うので、

「さては」

と、そばに寄って見ると、着ていた毛蓑けみのを杭にくるんで打ち込んである。

友達たちは大笑いをして、二人がかりで杭を引き抜き、蓑をはずして、連れだって帰った。

前々から、人の言い伝えていることなどは、自分の考えをおし通して打ち消して争うべきでない。これがすなわち、「魔がさした」ということであろうと、人々は言った。

四 隅すまのば様ということ

夜中に静かな寺へ行つて、四人で座敷の四隅よすみにかがんで、燈を消して、四隅より各々が座敷の真ん中へ這はつて出て、一人がそれぞれの頭を探つて、「一隅ひとすみのば様、二隅ふたすみのば様、三隅みすみのば様、四隅よすみのば様」と頭をなでてみれば、自分の頭とともに五つある。何度なでて

も五つある。

また、もとのように四隅に戻つて、別の人が前のように、「ば様、ば様」と、ひと頭ずつなでてみても、自分の頭とともに五つある。

これは、むかしから若い衆が打ち寄つたときに戯たむれに遊んだことである。自分も十三四のころ、友達と連れ立じようけいつて常慶院じようけいに行つて、このことをして遊んだが、幾度も出直し出直して頭をなでまわしたが、四つの頭があつて、自分の頭とで五つである。

牌寺はいじ（菩提寺）で、常々近所なので遊びにいく寺なのだが、なんとなく小淋こさびしくなつて心迷うものである。怪異のことなど、あればあるものである。若い殿原（男子の尊敬語）たち、隅のば様して遊ぶべし。

〔参考〕部屋の隅にいる神霊を呼び出すという遊びと思われる。泉鏡花「一寸怪」（一九一〇年）。大

鳥建彦「スマタラ来い」（『西郊民俗』第一〇六号、一九八四年）。常光徹「隅のば様と現代の民

話」（説話・伝承学会編『説話の始原・変容』一九八八年）。